

博物館の内側からの挑戦

— 展示を支える —

日高 真吾

(ひだかしんご)

文化資源研究センター

ハンズオン、博学連携、情報化……。

そのかげで博物館の土台を支える資料の保存や管理。

安全性や環境問題にも配慮した、資料管理システムは、

展示場の虫を防ぎ、事故を予防する地道な努力の上に成り立っている。



民博のオープン展示。東アジア・朝鮮半島の文化

日本最大級の展示場

民博の本館展示場は、とても広く、展示資料の数も多い。したがって、来館された方のなかには、その広さや展示資料の多さに、まず感動し、そして観覧中に疲れ果てたという体験を

重ねている。虫を管理する

を重ねている。

虫を管理する

展示場の管理方法は、それぞれの博物館の事情によって千差万別であるが、民博における特徴的な管理方法のひとつに虫害対策がある。オープン展示では、資料が露出しているために資料に虫が付きやすく、かつ食害されやすい。かといって、殺虫剤や防虫剤を撒いてしまうことは、環境問題の観点や、来館者をはじめ、館内職員など人体への影響も考慮すると最小限にとどめておきたい。したがって、

展示場の資料を守るためには、虫の侵入を予防する対策が必要となる。

このような虫害対策として、IPM というシステムが欧米の博物館で注目され、日本の博物館においても近年、盛んに提唱されるようになってきた。

IPM とは、Integrated Pest Management (総合的有害虫管理) の略で、虫を建物に侵入させない、虫の発生する環境を作らないという考え方をとっている。具体的には、日常的に清掃をこまめにおこなうとか、資料への目配りを怠らないということが提唱されている。

意外に簡単と思われる方も多だろう。だが、前述した民博の展示場の広さや資料の多さを思いだしてほしい。このような大規模の博物館で、IPM の作業を実践すると、人的負担がとても大きくなってしまふ。しかし、オープン展示という展示手法をとる限り、また、殺虫剤や防虫剤の使用を極力控えて虫害を予防するためには、IPM の考え方にのっとり、何らかの対策を講じなければならぬ。その対策として、民博がおこなっている虫害対策をいくつか紹介しよう。

民博の虫害対策のひとつに、開館前に毎日おこなっている展示場の巡回点検がある。従来、開館に支障がないかを確認するために、動線上にのみ

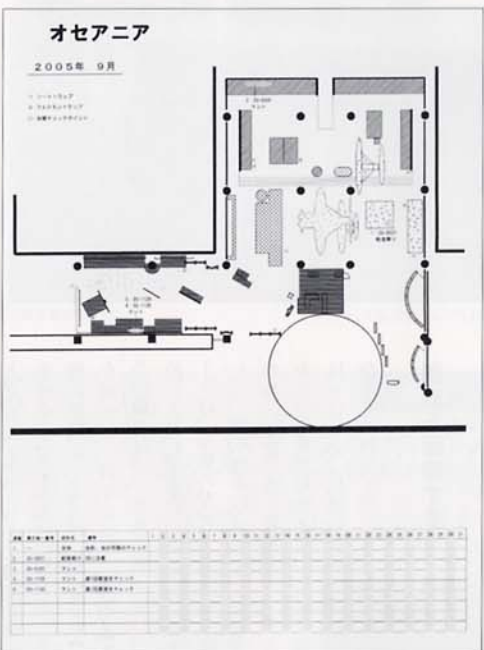


展示場の巡回点検



虫害にあった展示資料

よばれるものである。この展示手法は、資料と来館者との間に、ガラスケースなどの障害物がなく、資料を近くで見ることができ、迫力のある展示が演出できる展示手法である。ただし、資料を露出して展示するということは、資料が虫に食われてしまう虫害の事故や、人と資料の接触によって資料が破損する危険性がたえずつきまとう。このような展示手法の短所をいかに克服するかは、その博物館の実力を示すひとつの指標となる。民博の場合は、私のような保存科学を専門とする教員や、実際に資料を管理する博物館スタッフがそのための努力



展示場点検マップ